

文化部コーナー



第12回 六甲おろしの風に乗って

旗振山(その1)

布引支部 神木 哲男

須磨区と垂水区の区境は、旧摂津国と播磨国の国境にあたります。この辺りには南から鉢伏山、旗振山、鉄拐山があり、それぞれ独立峰としてその山容を誇っています。

鉢伏山は、旧播磨国、須磨区に属し、標高 246.3 メートル、その南麓には須磨浦公園があり、頂上が遊園地になっています。頂上までのカーレーサーがガタガタ振動し乗り心地が悪いことで有名になったことはご存じのことでしょう。この辺りは平安時代、寿永 3(1184)年、源氏と平家が戦った一ノ谷の古戦場としても知られています。江戸時代の「播州名所巡覧図会」では、「ひ(火)の山」と書かれており、古代、この山で火(狼煙=のろし)を焚いて敵の襲来を味方に知らせたことを窺わせます。鉢伏山の名前の由来は、神功皇后が朝鮮遠征の帰途、ここに兜の鉢の部分(頭にかぶる部分)を埋めた伝承に由来するといわれていますが、この伝承は西宮の甲山などにもあり、このような伝承は各地に残っています。一番わかりやすいのは山容が鉢を伏せたように見えるというものでしょうか。

鉢伏山の北側にあるのが旗振山で、標高 252.8 メートル、須磨区と垂水区の境界に所在します。旗振山の名前は、江戸時代に大坂・堂島にあった米会所で行われた米取引の相場を旗を振って西国地方に知らせた中継場所に由来することはよく知られています。

江戸時代は「石高制社会=米経済社会」といわれ、幕府や大名たちは農民から年貢として取った米を大坂に運んで売ってお金に換えなければなりません。米は季節や地域によって値段に大きな差が出る商品で、米がどれだけの値段で売れるか、それによって幕府や大名の収入に大きな差が生じます。地方の大名たちも天下の台所・大坂の米会所で取引される米の値段を知って、高い時に売れば大きな収入が得られます。そのためには刻々と変わる米の値段をいち早く知ることが必要でした。最初は人間が直接情報を運ぶ飛脚(米飛脚)によって全国に伝えられましたが、やがて飛脚に比べて伝達時間がはるかに速い旗振り通信が広まりました。

旗振り通信は、紀伊国屋文左衛門が江戸で色旗を使って米相場を伝えたことがその濫觴とされていますが、実際には 1745(延享 2)年、大和国平群郡若井村の住人・源助が大傘を利用して堂島米会所の相場を伝達したことが知られていますから、およそ 18 世紀中頃からはじめられたといっていいいでしょう。「米相場早移」などとも呼ばれ、電話や無線通信が普及する明治 40 年頃(20 世紀初め)まで行われていました。

西国方面には、大坂から尼崎、武庫川堤の中継点を経て、三番目の中継点が西宮と芦屋にまたがる雷岳(ゴロゴロ岳・標高 565 メートル)から北畑(東灘区本山町北畑・保久良神社の所在地)に伝達され、さらに中尾東山(中央区中尾町)、諏訪山(中央区諏訪山町)とつながり、諏訪山から旗振山を経て明石の旗山、神出旗振山へと中継され、西国方面に伝達されました。中継点の間隔は、長くて 3 里半(14 キロメートル)から 5 里半(22 キロメートル)と決められていました。

このような旗振り通信は、西国方面だけではなく全国各地でおこなわれました。したがって、「旗振り」の地名が付けられた場所が全国各地に残っています。

数字や伝達の文言が、旗の振り方で細かく決められており、迅速に、そして正確にかなりの距離がある場所まで伝わったことと思われます。

旗振山は、江戸時代から明治に至るまで経済の基本情報を全国に知らせるという点で欠くことのできない重要な場所であったといえるでしょう。現在もここには、本州四国連絡高速道路の鉢伏無線中継所があるのはその縁でしょうか。



旗振山山頂



芦屋ゴロゴロ岳



旗振茶屋と現在の無線塔